

7) Duchenne 型 PMD 患者の鏡映描写 による心拍数変化

国立療養所鈴鹿病院

宮崎 光 弘 野 尻 久 雄
片 山 幾 代 河 野 慶 三

Duchenne 型 PMD 患者の“情動”については、MMPI、Y-G テスト、Rorschach テストなど種々の方法を用いて検討をすすめているが、今回は人為的に設定された緊張場面における PMD 患者の身体反応を指標としてその特性を検討した。

< 対象と方法 >

対象は当院に入院中の Duchenne 型 PMD 男子 33 例（14-27 歳）と健常な男子高校生 24 例（15-19 歳）である。

鏡映描写はサイモ（成和 ME 研究所製、CF-503、図 1）を用いて行ない、描写経過および心拍数を心電計に同時記録した。

あらかじめ「鏡に星形の図形がうつっていますね。私が合図したら、スタート・マークを出発点として星形の枠の中を矢印の方向にできるだけ速く正確にたどって下さい。ペンは持ち上げないようにし、また枠の外にはみだしたらペンを離さずにもとの所にもどって先に進んで下さい。」と指示した。鏡映描写の 1 試行時間は 1 分間とし、1 分間の休憩をはさんで 5 回くり返した。

< 結 果 >

図 2 に安静時、休憩時、試行時の心拍数平均とその標準偏差を示した。安静時心拍数とは、検査前に安静状態で *radial artery* の触診により測定した脈拍数のことである。

PMD 群、control 群ともに休憩時に比し試行時に心拍数が有意に増加しているが ($P < 0.05$)、試行時の心拍数平均を比較すると、PMD 群、 102.8 ± 12.3 、control 群 86.6 ± 17.7 であり PMD 群が有意に高くなっていた。 ($P < 0.05$) 休憩時心拍数平均は PMD 群 98.3 ± 12.1 、control 群 81.8 ± 14.9 であり、安静時心拍数平均は、PMD 群 81.2 ± 9.0 、control 群 82.9 ± 15.7 とほぼ同じ値を示しているのに休憩時心拍数平均と安静時心拍数平均の差が PMD 群では大きくなっていた。

図 3 に休憩時、試行時の心拍数平均の推移を示した。

PMD 群では、心拍数が試行時にはほぼ一定の値になっているが、休憩時の値には第 3 試行後まで増加がみられた。control 群では、試行時、休憩時ともに試行回数につれて心拍数が減少しており、PMD 群とは明らかに異っていた。

PMD 群の心拍数の変化を観察すると図 4 に示す 4 つのパターンに大別された。症例 K.H にみられるパターンを除く 3 例には共通して試行時心拍数が休憩時心拍数よりうわまわっていた。症例 U.H は control 群とほぼ同型のパターンを示し、試行とともに心拍数の減少傾向がみられた点の特徴である。また症例 U.F は試行時、休憩時の心拍数に変化がなく、試行にともなう変化もほとんどみられない。症例 K.A は試行時の心拍数に変化はみられないが、試行時と休憩時の心拍数の差が顕著にみられた。

PMD群では、このパターンを示すものももっとも多くみられた。

症例K.Hの型を示すものは33例中3例にすぎないが試行時心拍数より休憩時心拍数の方が多い点に特徴があり、興味のあるパターンであった。

<ま と め>

身体反応を指標とした緊張場面におけるPMD患者の情動時性をまとめると以下のごとくであった。

- ① 検査に対する緊張が強い。
- ② 試行時の緊張が休憩時に比し強く、control群にみられる“慣れ”の現象が起りにくい。
- ③ 試行時に比し休憩時の心拍数のほうが多い特殊な反応型がみられた。

図1 鏡映描写装置

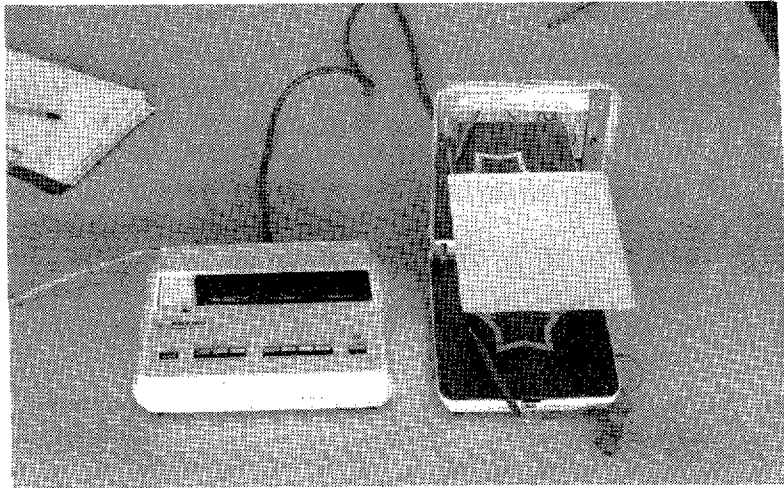


図2 心拍数平均値の比較

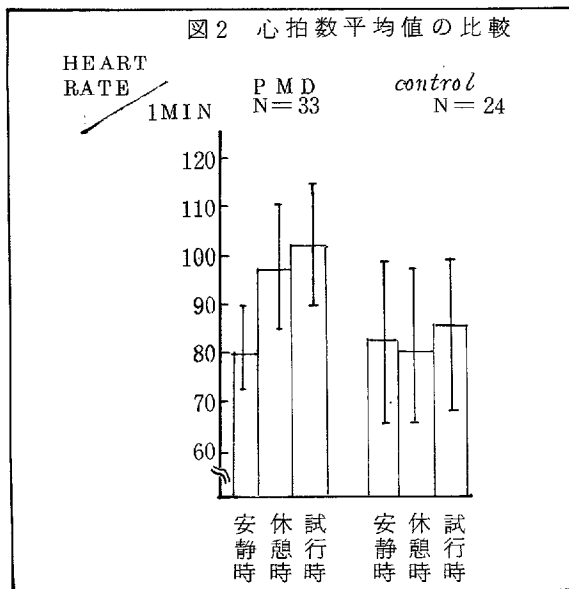


図3 心拍数の推移

図3 心拍数の推移

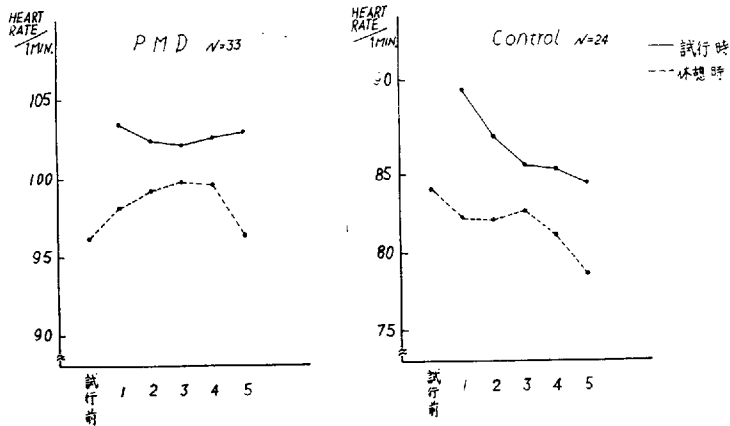
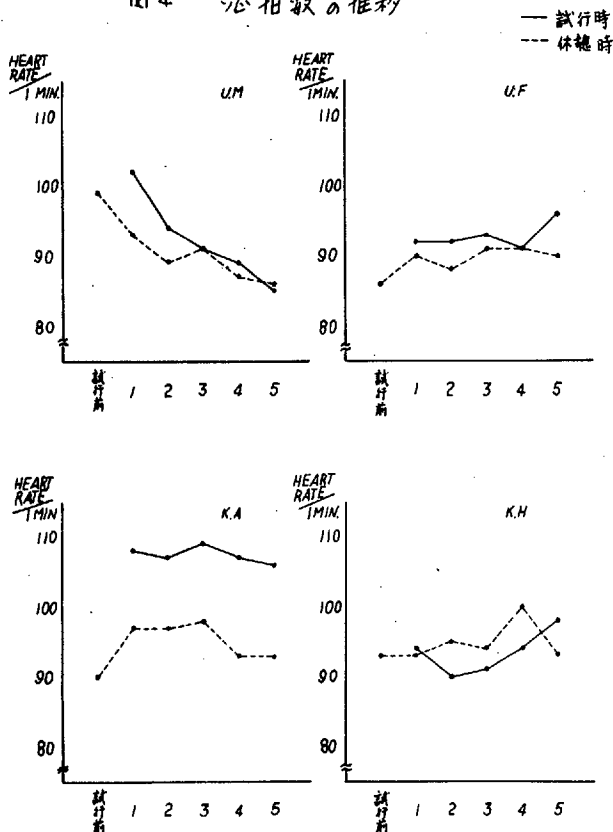


図4 心拍数の推移

図4 心拍数の推移



↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

Duchenne 型 PMD 患者の “情動” については、MMP1、Y-G テスト、Rorschach テストなど種々の方法を用いて検討をすすめているが、今回は人為的に設定された緊張場面における PMD 患者の身体反応を指標としてその特性を検討した。